

岡本かの子初期童話の構想

「秀子の人形」「テスの話」遡及

—

大正期の岡本かの子はすでに歌人として著名であり、歌集『かろきねたみ』（青鞥社、大正・十二）、『愛のなやみ』（東雲堂、大正・二）の刊行など斯界で活躍していたが、大正八年から本格的に散文の創作も始めていた。そして仏教の参究生活に入った同十年までには二つの短編小説と、本稿で紹介する二篇をふくむ四作の童話を発表している。

こうしたことからかの子の創作散文には、はじめのうち児童文学の比率が高かったことが認められる。その理由としては、大正時代が、鈴木三重吉の『赤い鳥』誌に代表される、創作童話の隆盛期であったことが挙げられよう。芥川龍之介や有島武郎といった純文学系の作家、また歌人の与謝野晶子などが「童心主義」の旗印の元にさまざまな佳品を発表していたことは周知のことである。かの子もこうした時代の動向に参入した数多くの作家たちの一人であったと考えられる。

大正期にかの子が発表した散文創作は、全集で確認する限り規模の小さな戯曲四篇のほか童話など十作に過ぎない。また作品の完成度という面からみても、生硬な習作という域を出ないようである。しかし、これから研究史的観点からも閑却されてきた作品群から、かの子文学の開花期とされる昭和十年代の創作群に繋がる特質は見出し得ないのであろうか。

外 村 彰

一般に岡本かの子は「鶴は病みき」（『文学界』昭十一・六）以降、小説家として文壇に認知されたとみなされている。小説の創作は、夭折した兄・大貫晶川の遺志を継ぐ、長い間の本懐であったとされるが、昭和十一年にはかの子もすでに四十七歳になっており、大正八年から数える十七年間の雌伏期を経ていたことになる。この間、かの子は仏教と渡欧という二大転機を経ており（後述）、昭和初期から仏教文学の執筆を開始し、^②のちの旺盛な小説創作期を迎えたわけである。かの子と仏教との関わりはその散文創作期とほぼ重なっており、その文学に仏教思想の内を云々されるゆえんなのであるが、大正八年から十年までの諸作には、仏教の影響を受ける前の、内発的な作者の資性が包含されているとも考えられる。あるいはこの時期に表現されていた何らかの個性的原質が、晩成期のかの子文学にあつてなお通底している可能性も存しているであろう。

このような問題意識から、本稿では大正十年以前の創作ではもつとも数の多い童話の諸作に着目することにした。とくに全集未収録であった童話二篇を紹介した上で、かの子文学の指向する構想の原型といえるものを考察しておきたいと考える。またそれら初期童話から後年の創作活動に連なる特質の抽出も試みてみたい。

—

二

従来、岡本かの子の「処女作」とされているのは小説「かやの生立」(『解放』大八・十二)であった。しかし「かやの生立」より一カ月早く発表されていた作品に「秀子の人形」がある。

「秀子の人形」は、『良友』大正八年十一月(四年一一)号に発表された。ちくま文庫版全集に収録されている「ひばりの子」(『良友』五年四号・大九・四)同様、目次題に「(幼年小説)」と付記されていることから、童話と位置付けられる。同作は現在のところ、散文の中では岡本かの子の第一創作とみなせるのではないが。

大正五年一月創刊の『良友』は、中村勇太郎編集、田中良の表紙画・挿絵によるコドモ社発行の低学年向け児童文学誌であり、昭和二年八月まで発行(推定)されていた。『良友』は欠号が多くその全体像を詳らかにしないが、浜田広介「むく鳥の夢」のような説話風の童話がみられたものの、良質の作品は同時代の児童文学誌に比して少なかったとされるのが、一般的評価のようである。^③留意されるのは、第一巻からかの子の夫・岡本一平の漫画漫文が毎号のように収載されていたことで、一平が同誌の有力な寄稿者であったことがうかがえる。こうした要因が「秀子の人形」の『良友』掲載に繋がったものと推される。

さて「秀子の人形」は、四百字詰原稿用紙に換算すると約八枚の分量であり、掲載頁は二段組で総ルビ、なかに二つの挿絵(膳を前にした着物姿の人形と厨の調度品、赤子を抱く横向きの秀子、乳母車を後ろにして裸の人形を水辺で洗う秀子)が印刷されていた。

同作は以下のように起筆されている。

秀子は一つの人形を持つてゐて、君ちゃんと呼んでをりました。

秀子は、その君ちゃんが何処から来たのか、何時生れたのか、そん

二

なことはちつとも存じません、また誰もそのことををしへやうともしませんでした。けれど秀子は、ただ、その君ちゃんがいかはしくて、かはいくてなりませんでした。君ちゃんのかはいらしさといつたら、とてもその辺の玩具屋に並んでゐるやうな、ありふれたお人形とは較べものにならないのでございました。

ここには、秀子の「君ちゃん」への強い執着のもととなる人形の「かはいらしさ」が強調されており、その偏愛がのちの事件の伏線となっているようである。

「全く、ほんとうの女の児のやう」な人形は、「その大きさも、ちやうど人間の赤ちゃん」程で、秀子はそれを二年間大切に扱っていた。母が「何年たつても指一本折らない」と「感心したやうに」言うと、秀子は「折つたら真赤な血が出ましょ。」と答えながらも、感心する母の態度を「不思議」にすら思っていた。こうした描写からは、秀子が人形を生身の人間同様の存在とみなしていたことが知られる。

その一年後、嫁ぎ先で姉が産んだ男の子を見た秀子は「私やつぱり君ちゃんが好い」と思うのだが、初めて抱いてみてその温かさ、柔らかさに愛感を覚える。そうして帰宅して抱いた「君ちゃん」の軽さ、固さ、冷たさに物足りなさを感じるようになる。それから秀子は入浴の際に人形もお湯に入れば、「きつと体が温かくなるわ」と考える。その頃には人形も少し黒く汚れてきていたので、秀子は洗ってあげようと思ひ、母にそのことを話したが、「まあ！人形にお湯なんか。大へんなこと。」と返答される。

母の言葉の真意を問おうとしなかった秀子は、「四五日あと」に「野川のへり」で遊んでいた時「ふと思ひ付」いて、人形の服を脱がせて水に入れ、夢中になつて「洗つてしまふ。すると人形の体は「ざらざらしたものに」なり、目鼻もなくなる。泣いて帰った秀子を叱る母は「へん

てこな君ちゃん」を見てつい笑うのであった。

そうして翌年「尋常一年生」となった秀子は、先生から「人形はやはらかい土を練つて作る」と教えられる。そこで初めて「君ちゃんといふものの体が、何であつたかわかつたやうな気がした」秀子は、それまで偏っていた愛情の向け方を、血のかやう人間に転化させることになる。

末尾は次のような記述であつた。

秀子は、もう君ちゃんを思ひ出しても悲しくなるやうなことはありませんでした。それに、もうお姉様のところの赤ちゃんが、少づつ笑ふやうになつて、だんだんかはいくなくなつて来ました。お姉様がいらつしやる度に秀子は、大喜びで赤ちゃんを抱つこしました。そしてお母様がお笑ひになりながら、

「秀子。お人形はもう欲しくないの。」
とおつしやつても、

「私、ほんとうの赤ちゃんの方が好きですわ。」
と、はつきりお答へいたしました。

「秀子の人形」は、三歳から七歳頃の幼児の日常における心的変化を追つことで、読み手に正しい愛情の向け方を感得させようとした作といえよう。愛らしい「君ちゃん」を人間同様に思い込んで大切に扱つてきた秀子であつたが、乳児を抱き、のち人形を洗つた事件が否定的契機となつて、愛情の対象を命ある「ほんとうの赤ちゃん」へと移行させるよつになる。このよつに、あどけない幼児の未分化であつた愛情の方向性が、「君ちゃん」の顔容がなくなるといふ悲しい出来事によつて、正しい対象へと転化されるという、いわば通過儀礼的な心の成長過程が描かれてゐるものと考えられる。

「君ちゃん」が実はただの土人形でしかないという事実を自得した秀子も、人形を洗つまでは愛情の正しい向け方を解せずにはいた。そうした

迷信めく偏執を解き矯正させたのは、秀子本人の心の動きであつた。このよつに「秀子の人形」には、もつとも身近な存在である母による訓戒がなく、他者との葛藤による悩みも介在していない。つまり秀子の偏つた嗜好は、自己の意志が招来させた経験によつて自ずと是正されるという展開になつてゐるのである。このような自発性を尊重する描かれ方には、子ども的心情の善性を理想視する童心主義の影響も存してゐるのである。

ところで後年のかの子の小説群には、美や偶像など何ものかに執着し、それを一途に憧憬する人物が多く登場する。そうして「秀子の人形」もひたすらな対象への偏愛というモチーフが見出され、そこからかの子文学らしい特徴が認められる。また、持続する誠直な愛着が実は迷妄であり、それが否定的契機によつて健全な状態へと浄化されるという、「迷妄の浄化」といふ構図が、「秀子の人形」からは見出せるようである。

一般に登場人物の心機ココロの転化は小説の世界に頻繁にみられるものではあるが、かの子文学においてはその転化が宗教的といふほど高次の段階を指向する場合が多い。こつした意味での「迷妄」の「浄化」は、後年のかの子文学の構想に顕著にみられた特徴である（後述）。ただ叙述面シヨウでいうと、円熟期マツルのかの子文学に通ずる文体の個性的表出は、「秀子の人形」から読み取り難い。

なお前述した「かやの生立」は、作者の少女期の回想をモチーフとした詩情ある短編で「秀子の人形」とは、幼女を主人公とする点で題材の近似性が認められる。ちなみに岡本一平は、かの子の文学には「家とか縁故とかに対し人性的な表現ヒトミの責任を感じ、パツシヨンのある無しヒトミに聞らず書き残し置いた溼筋のもの」があるとした。自伝的色彩の強い「かやの生立」は、一平が例示していた「老主の一時期」の「いのち」昭十

二・十)などに連なる「溲筋」の作品の嚆矢とも考えられる。

三

もう一つの全集未収録作「テスの話」は、童話では第四作にあたる。掲載誌の『童話』(大九・四、十五・七)は、『良友』と同じコドモ社の発行で、千葉省三が編集し、小川未明、与謝野晶子、西条八十といった名だたる文学者が執筆した、大正期の代表的な児童文芸誌である。

「テスの話」は、『童話』大正十年六月(二巻六)号に発表されており、同誌にかの子が唯一発表した童話であった。岡本一平の漫画漫文調の創作童話がしばしば『童話』にも発表されていたことから、「秀子の人形」等と同じように、コドモ社と縁深かった一平の勧めによる執筆であったとも考えられる。

「テスの話」は「秀子の人形」と同じく四百字詰原稿用紙にして約八枚の分量であり、掲出頁は二段組、総ルビで、「コウジ」(藤谷虹児か)の署名がある二つの挿絵(洋菓子を持った着物姿の娘にじゃれつく大型犬のテス、竹皮包を差出したテスの前で頭を下げている痩せた雌犬)が付されていた。以下に梗概を紹介する。

「体の大きい、毛並の美しい犬」テスは、「村一番の長者」の家に飼われて、「気楽に仕合せ」に暮らしていたことから「傲慢」な性格になっていた。テスは、平気で他の犬たちに「かなり迷惑になる悪戯」をするようになり、村の犬たちは憎み嫌うのだが、力も強く権勢のあるテスにはかなわないため、ただ陰で悪口を言うのみであった。

ある春の日、馳走を食べた午睡のあと「なにか、うとつとと考へ始め」たテスに「ふと、途方も無く面白い考へ」が浮かぶ。台所の芥箱から肉を包んであった竹の皮を取り出したテスは、その中に左官の使い残しの

四

「ネバ土」を並べ、器用に結わえ直し牛肉が入っている包みのようにみせかけて、「村はずれの寺の藪かげのほら穴」に向った。そこには「長いこと思つて」餌も食べられずにいた目の不自由な雌犬が住んでいた。

テスはその「馬鹿正直な雌犬」が「きつと俺のこの計略にかかる」と考えると「愉快」でならない。そうして竹の皮包みを、もはや死を待つばかりの雌犬の前に置く。突然の訪問客に対し雌犬は「死にますれば、神様のおそばへまゐれるのですから、いつそもう安心して死ぬつもり」と落ち着いて話す。テスは優しい声で「お前さん」が「あまりお気の毒」なので、死ぬ前に一度ご馳走を食べさせてあげようと持つて来たと言葉巧みに告げる。

この雌犬もテスが「傲慢で評判の悪い」のは知ってはいた。しかし、「馬鹿正直」なために「あまり思ひがけないテスの言葉に涙を流してよろこび」、「幾度も頭を地にすりつけ」礼を言うのである。テスはそのような雌犬をみて「ぷつと吹きだしさうに」なりながらも「大恩をほどこした様な顔をして悠々と」その場を去る。

ここまでのテスは、ただ残酷な悪漢めいた犬として描かれていた。しかし「五分ほど後」に、「お寺の藪の出口の所」を歩いてきたテスの心の中に「ふと」、「チクリと痛んだもの」が生まれる。それは次第に激しくなり、立ち止まったテスは以下のように自省する。

「ああ、俺は悪いことをした。俺はあんなに可哀さうな雌犬をどうしてあんな、むごたらしいだましかたをしたのだらう。だのに、雌犬は、こんな悪い俺を少しも疑はずに、あのよろこび方はどうだつたらう。だました俺より、だまされたあのめくらの乞食の方が、よつほど正直な、美しい心を持った仕合せものだ。ああ、済まないことをした。」

このようにテスは改悛の感情に目覚める。そうして、「針のやうな痛さ

でテスの心を、刺し続け「悔」が、テスの良心、他者の苦しみへの想像力を喚起させるに至るのである。帰宅したテスは、「今度こそ本当に、あの憐れな正直な」雌犬を「よろこばせてやる」として、「夕飯の、美事な肉やらごはんやら」を、一口も食べずに急いで運んで行った。

以上のような内容からは、それまで他者の心を意に介さず傲慢な振舞いをして来た強者が、「正直」に生きる弱者の心の美しさに気付き自己の過ちを悔悛する、といった教訓的な主題を見出すことができよう。そして境遇の異なるテスと雌犬は、健康と瀕死、傲慢と謙虚、そして物質的に満足するだけの「仕合せ」と不遇にあつても心は自足している「仕合せ」といった対照的な描かれ方をされているのである。

長者の庇護のもとで立派な体格の犬に育ったテスの慢心は、増長はしても矯正されるような機会がなかった。いっぽう病気となって空腹と孤独のまま「ほら穴」で臥せっている雌犬は、「神様」を信じ従容として死の運命を待つ。そしてテスの偽りの親切を「馬鹿正直」に信じることで応じ、心からの感謝すら表わす。おそらくこの雌犬像には、当時教会に通っていたかの子のキリスト教観も投影されているものと推察されるが、このような徹底した「正直」が、テスの内なる「正直」さを目覚めさせる契機となっていた。他の犬たちの嫌うテスの悪戯心を疑わなかった雌犬の良心が「針」となって、愚かで残酷なこの犬の邪心に呵責を科したのである。

テスは「馬鹿正直」な雌犬により「悪い俺」を自覚し、物質や健康面で「仕合せ」なだけの自己の心の貧しさを省みることになった。犬たちの世界を描くことで、人間が陥りがちな慢心、他者への蔑視願望を読み手に連想させ、反省を促そうとする作者の意図もまた見出せるであろう。「正直な、美しい心を持った」雌犬のほづが「仕合せもの」という心の

大切さが、テスに自覚されるといった構想は、いわば「迷妄の浄化」過程であり、そこに「テスの話」の眼目が存するものと考えられるのである。

なお続橋達雄は『童話』誌の主調として「あくまで児童の視点に立ち、その世界を尊重しながら共楽共憂、高く美しいものをめざそうとする姿勢」を挙げていた。正直な心、何かを純一に信ずる「美しい心」を持つて生きることの「仕合せ」が、邪心の前否を改悛させるという「テスの話」にこめられた主題からも、同誌における人間の善性肯定の姿勢との共通項がうかがえるようである。

それから、前掲の二作のほかにも、大正十年までにかの子は童話第二作「ひばりの子」(『良友』大九・四)と、第三作「トシオの見たもの」(『朝日新聞』大十・四・二十一―三十)を発表していた。まず「ひばりの子」は、幼い兄妹が、「婆や」の持つて来た雲雀の子を互いに「一生懸命」欲しがっていたが、そこに現われた母のとりなしで「思いつめていた心」が「急にとけ」、素直に元の巣へ戻しに行くという話であった。

次に「トシオの見たもの」は、主人公である十一歳のトシオが、世の現状への懐疑のため心を「暗く閉じ」ていたところ、櫻の樹下に現われた亡祖父から「原始の国」の神の話を聞くという筋であった。祖父は「神様を忘れて居る人間の中で」「不愉快に暮らして居る」孫を救おうと「筒形の眼鏡」を覗かせた。そこでトシオは、神が四つの小鳥から人間を作り、「運命」の種を入れた壺を持たせて幸福を授けようとしたことを知る。しかし人間はやがて私欲に生きるようになり、小鳥や壺の記憶を放擲してしまったと語った祖父は、人間に神が与えた病、死や因果の報いといった「正しい賞罰」についてトシオに言い聞かせてゆく。こうして全てを理解したトシオは、眼が祖父と同様に澄み、人々にこの話を伝えようと幸福に満ちた様子で帰って行くのである。

これら二篇には共通して、「テスの話」と同様、頑なに歪んだ自我が正しい者の登場によって改心するという構図がみられる。「秀子の人形」と照応するところを求めれば、やはり「迷妄の浄化」といいうる構想の共通性が認められるのである。狭い視野にとらわれて心の歪みを抱えていた主人公たちが、ある契機を境として正しい観点から広く世界の意味を把握しようとするといった、正しさへの指向という特質を各童話は内包しているようである。

ところで関英雄は、大正期児童文学の主潮を「ロマンティズムと感傷主義」^⑤としていた。しかるに「ロマンティズム」の持っている奔放な空想力や現実の不如意からの飛躍、また「感傷主義」に往々に現出する詩的美感は、ここまでみてきたかの子ども話の第一義的な特徴となっているとは言い難い。また同時代や社会に対する批判的な問題意識の広がりも希薄であった。むしろ大正期にかの子が書いた童話からは、身近な世界に多く材を求め、エゴイズムの克服を主調とする道徳中心の「教訓」性を重視する傾向が見出されよう。そうして、そこにはやはり子ども善性を信じる「童心主義」を基底とする正しさへの指向があり、その筆法として「迷妄」が否定的契機を経て「浄化」されるという構想が貫流していたと考えられる。

四

さて、大正十年から昭和十年代の間において、かの子には小説創作の飛躍を招来する二つの転機があった。一つは家庭生活の危機をきっかけとして大正六年からキリスト教に近づいた（初期童話とキリスト教との関連も考察しておくべきであるが本稿では割愛した）後の、既述した同十年からの仏教研究への専心であった。その主だった成果として、昭和初期に

『読売新聞』等に発表され、『散華抄』（大雄閣、昭和四・五）にまとめられた仏教文学群が挙げられる。^⑥ 漆田和代が『散華抄』を、「人間」「宗教」「芸術」の「三座鼎立」を調和させようとしていたかの子が、『いのち』の表現者となって生きる「方途を得た」「記念すべき里程碑」とみなしたように、かの子は『散華抄』以降、宗教と文学の融合を志向するようになったのである。

もう一つは、昭和四年から七年にかけての長期欧米旅行の経験である。夫の岡本一平も「外遊が薬に効いたのか大体は晩稲のかの女がこの機会に蓄を破つたのか、兎に角、外遊以前と以後とは別人の観がある」というほど、かの子にとってこの海外旅行体験は意義深いものとなった。ここでの見聞を物語的紀行文集『世界に摘む花』（実業之日本社、昭十一・三）にまとめ、『観音経』（大東出版社、昭九・十）などの仏教啓蒙書を著すなどした後、昭和十年代となってようやくかの子は小説家としての開花期を迎えるに至る。

仏教思想の摂取と欧米での生活体験という、二つの大きな文学上の転機を経たかの子は、それらから得られた諸要素を取り込むことによって、後年の文学的雄飛の準備をなしていった。そうして二つの転換期の助走段階にあたる大正十年以前の初期童話は、かの子が仏教思想を身に体し創作に投影させる以前の作品であり、その創作方法の基底には「迷妄の浄化」が内在していると考えられたのであるが、このような構想の特徴は、その後の仏教を題材とした戯曲や短編群にも継続深化されていったものと思われる。

たとえば、戯曲「取返し物語」（『大法輪』昭九・十一）からは、「テスの話」の雌犬を連想させる「正直な、美しい心を持った」人物への強い共感が読み取れる。^⑦ 法難により親鸞の「御影像」を三井寺に預けていた蓮如に対し、三井寺が「取戻し度くば、生首二つ持参いたせ」と伝えた

ため、篤い信心を持つ近江堅田の漁師頭・源右衛門は自分と二十三歳の息子・源兵衛の首を差出そうとし、許婚のおくみと源兵衛を夫婦とした翌朝に、覚悟を定めた息子の首を斬った。そうして父の口上を聞いた寺の長老は感嘆し、親鸞像を返したという筋である。長老は像を守るべく親切心から苦肉の難題を考えたのであったが、時すでに遅く、おくみと蓮如たちは源兵衛の強い信仰の力に感銘し落涙する。源右衛門親子の無私の行動は、まさに妙好人のそれといえるが、命を惜しまず酷薄な運命を受け入れる源兵衛の一途な「正直」さは、おくみの心をそのまま「浄化」するのである。こうした源兵衛の信心は、「テスの話」の「神様」を信じる雌犬のそれを発展させたものと考えられないだろうか。

なお晩年の小説「みちのく」(『雄弁』昭十三・九)には、「白痴少年」四郎と、彼の「一本気」な心に「浄化」されて、生涯嫁がないまま彼を待ち続ける「お蘭」が描かれる。ここからも「正直な、美しい心を持つ」人物の造形が見出せるようである。このように「テスの話」の雌犬から「取返し物語」の源兵衛、そして「みちのく」の四郎に通じている「正直」の力は、各々に向けられたテスの邪心、おくみの愛、お蘭の労わりを、高い境地へと「浄化」している。お蘭の場合は「迷妄」とするには留保も必要であろうが、テスとおくみの心境の変化からは、前述した「迷妄の浄化」の構図がみてとれるようである。

また昭和十年七、八月『禅の生活』に発表された小説「鯉魚」は、京都の渡月橋べりの禅寺で「食後の生飯」を鯉たちに与える役の「昭青年」が、偶然知り合った少女「早百合姫」と恋に落ち、それを見咎めた僧たちと「法戦」をした話であった。「昭青年」は禅問答の際「鯉魚」とのみ答えているうち「鯉魚の功德の報い」から「生命の遍満性、流通性を体証」して悟達の境地を得る。こうした内容からも、「秀子の人形」「テスの話」に通ずる「迷妄の浄化」の構図の通底がつかがえるようである。

る。

こうした構図は、『散華抄』所収の戯曲「阿難と呪術師の娘」においても明瞭に表わされている。岡本一平は外遊後のかの子が、作品を「書くに当り、宗教と文学を、その双方を生で入れ混らせることを極力避けて来た」としながら「この戯曲はその時代のかの女を概念的に掴むに都合のよい僅な作品の一つ」と解説していた。「その時代」とは、昭和初めの『散華抄』執筆期であり、同作は一平によれば生硬ながらかの子の仏教文学を「概念的」に理解するには格好の作品ということになる。

かの子はこの戯曲の「あとがき」で「この劇の目的とする処は、恋愛の浄化過程の研究」とした。ここにいう「浄化過程」とは、仏弟子の阿難が愛欲の悩みをつきぬけて蘇生し、悟達の境涯を得る場面を指している。ちなみに、かの子は阿難の「浄化過程」での仮死状態について「この間の消息」を「宗教文芸」にとつて「表現意図の核心」をなしている^⑬。「回心」といふ心象^⑭と説明していた。それから「回心」を経て「悟り」に至るといふ場面は同じく『散華抄』に収められた戯曲「寒山拾得」にも描かれる。こうした恋愛など我執の克服を「回心」で表現する構図は、初期童話の「迷妄の浄化」を仏教的構成に発展させたものといえるのではないか。

かの子の仏教文学に描かれた「回心」に照応する表現を先述の初期童話に求めてみると、以下のような箇所が挙げられる。「テスの話」のテスは「ふと」、「雌犬への「愉快」な悪戯を思いつき、「ふと」、「良心の呵責による「悔」の痛みを覚えていた。この二つの「ふと」が、後にテスを回心に導きつけとなったところである。いささか唐突で小さな心機^⑮の転化を示す「ふと」、「は、結果的にテスを「美しい心」の雌犬と出会わせ、ひいてはテスを改心に向わせる予兆となさしめていた。

「秀子の人形」においても、「ふと」は三度記されている。それは人形

を「お湯」に入れたら温かくなると「思い付」く場面と、野川で人形を洗おうと「思い付」く時、そして学校で先生から「人形」の話聞いたあと「ふと去年の君ちやんを思ひ浮べ」たところであった。やはり秀子の心境の転機に「ふと」が用いられている。こうした例から、作品構想においていえば、初期童話ではたんに「ふと」と表現されていたのみであった心機が、後年「回心」という仏教思想的な肉付けを加えた表現へと展開されていったものと解されてくる。

ところで、これまで述べてきた「迷妄の浄化」の構想の深化をめぐり、かの子は昭和十年のエッセイ「仏教文学提唱とその困難な諸点」¹⁷⁾のなかで以下のような興味深い意見を述べていた。すなわち「仏教に絡まつてゐる旧情感を篩ひ捨て、仏教の第一義に直接触れ、そこで得た生命のみづみづしさから浸出した新感情を表現するものは極めて稀である」として「第一義の宗教文学の使命は、宗祖、祖師の立教開宗と同じものを、人間性に顧み時代性に応じ、情緒に於て打ち建てるのでなくてはならぬ」と立言し、創作者の視点の問題に言及した後、次のように書いていたのである。

文学といふものは、時代と人間性に密着な関係を持つものである。その点、宗教も同じことであるが、(中略)宗教は教義的のものである。(中略)文学は事情的、情緒的のものである。時代をも人間をも具体的に於て掴まねばならない。描き出すものは、個の時代、個の人間たることに於て時代性、人間性を表現して行かねばならない。宗教の方では煩悩即菩提と言つて済むが、文学では、誰が誰に対して煩悩を起し、如何なる心機一転のしやうによつてその煩悩が菩提に変わったか、いくら少く見積つても、一つ二つの個性的の具体を示さねば効果はないのである。(傍線引用者)

右の引用からは、かの子が大乗仏教の根本的教義である「煩悩即菩提」

の文芸的形象を提起していたことが知られる。つまり「煩悩即菩提」を、時代と人間の「具体」的な脚色をふまえながら、「煩悩」から「菩提」への転化という構造で表現するというのである。おそらく「阿難と呪術師の娘」や「取返し物語」「鯉魚」に描かれた愛欲の「浄化」は、この「煩悩」から「菩提」への転化の表現例とみなしうるであろう。そして前述の「回心」も、作者にとつての「即」の文学的解釈といえるのではないだろうか。

ちなみに宗晴美は、「阿難と呪術師の娘」の内容と作者の自解から「やがて五月に」(『文芸』昭十三・三)の主人公・泉宗輔の心境の転化から「浄化の達成において生命を自覚するという展開とつながる思想」を見出し、「やがて五月に」を「戯曲『阿難と呪術師の娘』の思想的内容を、泉宗輔の浄化の物語として小説化したもの」とみなしていた¹⁸⁾。じつさい、「阿難と呪術師の娘」のような愛欲が「浄化」されるという構想をもった昭和十年代の小説は、「やがて五月に」のほかにも数多いようである。たとえば「花は動し」(『文芸春秋』昭十二・六)、「金魚撩乱」(『中央公論』昭十二・十)、「河明り」(『中央公論』昭十四・四)といった晩年の代表作は、それぞれ愛欲や芸術美に執着した登場人物が、より高次の対象と出会い、個々の否定的契機を経て「浄化」されるという筋立てであった。各作品の分析は別稿に譲るが、「花は動し」の桂子や「金魚撩乱」の復一、また「河明り」の「私」や木下が自己のこだわりを脱し「浄化」してゆくという内容からは、心機の「回心」の変奏例が見出せるようである。

以上みてきたように、初期童話の構想として指摘することが可能な「迷妄の浄化」は、後年の創作に至つて恋愛など執着(迷妄)が、「正直」や美といった高次の対象を媒介(否定的契機)として「悟達」的な「浄化」に移行するといつかたちで、後年にまで継続発展されていったと考

えられた。かの子の昭和十年代の小説には、大乘仏教思想の底流がこれまで指摘されてきたが、「煩惱即菩提」の構想化はその一例とみなしうる。そうして、これら小説の構想は、「秀子の人形」「テスの話」の「迷妄の浄化」を基底としており、のち仏教思想を契機とし深化拡大されたものと考えておくこともできると考えられる。換言すれば、岡本かの子の小説に顕著な方法といえることができる。「煩惱」から「菩提」への転化の構想は、さかのぼれば大正時代の初期童話の世界における「迷妄の浄化」を原型としていたものと考えられるのである。

なお、ほかにかの子には「東海道五十三次」(『新日本』昭十三・八)のような執着(迷妄)が持続したままの小説もあり、それらに対してはかの子文学に頻出する「生命」をめぐる考究が必要となると思われる。初期童話においてはとくに「生命」の内在性は認められなかったが、「生命」の力とそれが受け継がれる様相は、仏教との関連性から多く言及もなされており、かの子文学の个性的特徴の一つとされる。こうした「生命」観をめぐっては仏教のほか、外遊体験からのアプローチも必要であると考えられるが、上記したような問題については昭和十年代の諸作の解説とあわせて爾後の課題としておきたい。

注

- ① 川端康成「岡本かの子」(『文学界』六巻四号、昭十四・四・一)に「かの子さんが作家として立たうとしたのは、亡兄の遺志を果すという気持も強かった」「創作は初恋であり、また失恋であるとの意味を、かの子さんは私によく言った」その勉強は少女の頃から今まで費かれて来た(一二四頁)との証言がある。
- ② 「私の作について」(『時事新報』昭九・十二・九)には「仏教の研究に身を委ね」てから「昭和三年」になって「阿難と呪術師の娘」「寒山拾得」を創作したが、それまでの「十三年間かう云ふもの」(『仏教文学』を「書くことを、恩師に固く禁ぜられてゐ」たという。ただしかの子は

大正十年から仏教を信仰し始めているため「十三年間」は記憶違いではないかと推察される。

- ③ 鳥越信「解説」(鳥越信ほか編『新選日本児童文学1 大正篇』小峰書店、昭和四十四・六・五)三六八～三六九頁参照。

- ④ 「本冊中の小説に就て」(『新日本文学全集第二十五巻』改造社、昭和十五・五・二十)四八一頁。「兄妹」(昭十一)、「春」(昭十一)、「雛妓」(昭十四)、「ある時代の青年作家」(昭十四)、「美少年」(昭十六)等も同傾向の小説と考えられる。

- ⑤ 「テスの話」にみられる、「正直」という「美しい心」を持っている者は「仕合せもの」という道徳的な人間観は、かの子自身の生育環境にも繋がっているように思われる。たとえば「あの子の一番よいこと」(『主婦之友』一六巻一―号、昭和七・十)でかの子は、母と「とても仲よし」であったと述べ、母が親戚に「あの子が他のどの点に優つてもよいことは、正直で、素直なことです」と言ったことを強く記憶している。そうした「第一義的なこと」を母が教えてくれたとするかの子の「正直」さへの指向は、初期の童話作品の主題にも投影されている。かの子の韻文にもこうした傾向は色濃い。たとえば歌集『浴身』(越山堂、大正十四・五)の詠唱「またひとつノ白歯を折らむノ調をノわれまた云ひぬ」などは、かの子の倫理的側面を強く表出しているようである。

- ⑥ 「雑誌『童話』の刊行」(『大正児童文学の世界』おうふう、平成八・二・二十五)二〇九頁。

- ⑦ 岡本かの子の童話は、このほか現在までに「花子」(『週刊朝日』大十三・九・二十八)、「山のゴドモ」(『時事新報』昭九・七・十五)、「お鍋とキヤベツ」(『読売新聞』昭十一・八・三十)、「咲く花洞む花」(『少女倶楽部』昭十二・八)の存在が知られる。いずれも小品である。「花子」は、草花になった兄妹を摘もうとした夢をみた幼女の話で、四百字詰原稿用紙にして約三枚半の分量。同枚数の「山のゴドモ」は、山に育ったヤマキチが、鷹に海へ連れて行つてもらうが、魚や波に相手にされず泣いて山に戻り、山の生物の「タイシヨウ」になるという筋。約三枚の「お鍋とキヤベツ」は、日本のキヤベツとそれを煮るための鍋が異様に大きいという英国での頓知話。「咲く花洞む花」は約四枚で、A子の止める

のをきかずダリヤの花を折り取ったB子を描く教訓話。

⑧ 「大正期の児童文学」前掲『新選日本児童文学1 大正篇』三二二頁。なお、同書収載の『童話』総目次にはすでに「テスの話」の記載があり、『童話』には複製版(岩崎書店、昭五七)もある。

⑨ この時代のかの子の動向については、拙稿「岡本かの子と高楠順次郎 雑誌『アカツキ』の周辺」(『滋賀大國文』三六号、平成十・九)を参照されたい。

⑩ 「岡本かの子『散華抄』の位置」(『地軸』一四号、平成七・三・八)六三頁。

⑪ 前掲「本冊中の小説に就て」四七七頁。

⑫ 同作の「前がき」には、作者が昔「比叡の山登りして坂本へ下り、麓の寺で「源兵衛の髑髏」を突見したとある。岡本一平「琵琶湖めぐり」の(十)「源兵衛の髑髏」(『朝日新聞』大七・七・八)には「三井寺の下の両願寺」でその現物を見たと記され、この旅行時にかの子も同行していたと推測される。なお三井寺南別所にある両願寺は現在無住であり、「げんべ多くびでら」等の石碑が残るが、大正期に参詣人で賑わったという「髑髏」も存在しない。元三井寺別院・等正寺(浄土真宗)に伝来する「堅田源兵衛法死之首」が由緒正しいものとされる。

⑬ 「みちのく」については、拙稿「岡本かの子『みちのく』『待つ』をめぐって」(『仏教文学』二二号、平成十・三)を参照されたい。

⑭ 前掲「本冊中の小説に就て」四七七～四七八頁。

⑮ 「宗教劇の不可解所とは 岡田八千代氏の評について」(『読売新聞』昭九・十二・十八)一〇面。ここでかの子は宗教の「実践者が体験的に引き絞つて行つた解脱の最後の把握感は、一種の恍惚感」とみて、「要するにわれを忘れて入り入る時間と空間とは暫くその人の心上に爪を刻まぬ没頭の世界」だとしている。さらに「そこを出てあとで顧みて、刹那なりとも無限無窮なるものに面接したといふ一種の驚きを持つのであります」と書いていた。

⑯ あるいはその良心の萌した場所が「お寺の藪の出口」であったことから、そこにはテスの慢心を正し回心させるために超越者の投じた差配(方便)の徴が隠されていたのかもしれない。

⑰ 『仏教文化』九卷二五号、昭和十・六・六 四～九頁。ちなみにかの子は「文学と宗教との交流する世界」という問題を解決する「座標軸」に、こうした心理転回にみられる「恍惚感」を置いていた。そして「真に宗教的と言へる文学」は「恍惚感を提供する分量の多いものを指すべき」で、「解脱の世界を感じせしめない文学は真の意味の宗教文学とは言へません」としている(『文学と宗教との交流する世界』(『むらさき』二卷八号、昭和十・八・一 一二～一三頁)。こうした見解からも「回心」には宗教的「恍惚感」が内包されていると考えられる。

⑱ 「岡本かの子『やがて五月に』をめぐって」(『大谷大学大学院研究紀要』一三号、平成八・十二・一)一三三頁。

⑲ 各作品については、拙稿「岡本かの子『金魚撩乱』成立考」(『論究日本文学』六五号、平八・十二)、「岡本かの子『金魚撩乱』と『維摩経』」(『昭和文学研究』三四集、平九・二)、「岡本かの子『花は動し』」(『滋賀大國文』三五号、平九・六)、「岡本かの子『河明り』 我執から包容へ」(『立命館文学』五七五号、平十四・七)を参照されたい。

⑳ 石川淳「岡本かの子論」(『近代日本文学研究 昭和文学作家論上巻』小学館、昭和十九・四・二十)他を参照。

㉑ 宮内淳子「岡本かの子の生命観」(『国文学解釈と鑑賞』別冊(生命)で読む20世紀日本文芸』平成八・二・十)等を参照。

追記

・本文の引用は、ちくま文庫版『岡本かの子全集』に拠った。

・「秀子の人形」は、神奈川県立近代文学館所蔵『良友』から見出された。

・「テスの話」の所在は、立命館大学講師・古澤夕起子氏の木下李太郎「崑崙山」(明治文芸講演会誌『明治の森』一号、平成十五・十一・八)の紹介文により知り得た。古澤氏にはあらためて深謝を申し述べたい。

・引用中、今日からみれば不適切と思われる表現を用いている箇所もあるが、故人の作品であること、時代背景等を考慮し、原典通り収載した。

(本学文学部非常勤講師)